

LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学
学習支援センター

2023 No.38

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

2024年度から導入予定のTA・SA 制度について…1 ピア・サポートの理論を活かしたTA・SA の育成…2 第38回 初年次教育セミナー…3
第13回 教育力アップセミナー…4 第77回 LSCドキュメンタリー・アワー開催報告…5
SPOD フォーラム 2023・初年次教育学会 第16回大会 参加報告…6 LSC 資料紹介…7 <学び★サブリ>習慣化の難しさ・退職のご挨拶…8

2024年度から導入予定の TA・SA 制度について



○ 副学長・教学センター長
羅 星仁

大学評議会において「広島修道大学ティーチング・アシスタント（以下、TA）及びスチューデント・アシスタント（以下、SA）に関する規程」が制定され、本学も2024年度からTA・SA制度がスタートすることとなった。

日本の大学にTA制度が多く導入されたのは1990年代から2000年代にかけてである。文部科学省のTA補助金事業の対象範囲が実験・実習・演習等の教育補助業務に限定されていたこともあり、TA制度の導入は分野的に文系よりは理系に偏っていた。また、文系中心の地方の私立大学はTA制度の運用に欠かせない優秀な大学院生の数が国公立大学に比べて極めて少なく安定的に確保できなかった。このような背景から、文系中心でかつ大学院生の少ない地方の私立大学ではTA制度の導入が遅れていた。

日本でSA制度導入のきっかけとなったのは、2000年6月に文部省高等教育局から出された「大学における学生生活の充実方策について：学生の立場に立った大学づくりを目指して」（通称「廣中レポート」）という報告書であった。同報告書では、「学生中心の大学」への転換を提言するとともに、各大学における改善方策の一つとして、正課教育および正課外教育において「学生に対する教育・指導に学生自身を活用すること」を掲げた。これ以降日本の大学において初年次セミナーや情報処理などの演習・実習科目を中心に大学院生を中心としたTAとは区別した形で学部の上級生を中心とするSA制度と称する制度が導入されたのである。

SA制度の導入が拡大された背景として講義形式が中心であった教授方法の変化があった。2008年12月に中央教育審議会が出した答申「学士課程教育の構築に向けて」において学士力が提示されると同時に、学生の主体性・能動性を引き出すような双方向型の授業の重要性が唱えられた。これをきっかけに、少人数制のセミナー形式の授業が多く導入され始め、教授方法としてもディスカッション、プレゼンテーション、協同学習、PBL（プロジェクト型学習あるいは問題解決型学習）、フィールドワーク、インターンシップ、サービス・ラーニングといったアクティブ・ラーニングが多く導入された。

このような教授方法を導入した授業において教員からTAあるいはSA制度の導入を求める声が大きくなったのである。本学においても正規科目である情報処理科目、学習支援セン

ターにおける学習支援（数学）、図書館や入学センターやひろしま未来協創センターにおける活動などに学部学生を活用している実績がある。また、オンデマンド授業の普及に伴って大規模授業における学生の質問への回答やサポート体制などの整備に学部学生の活用を求める声も次第に大きくなってきた。

このような背景から本学ではSA制度を中心としながらもTA制度と合わせて関連制度を導入することを検討し、2024年度から導入することとした。本学のTA・SA制度に関する規程の第2条では、TAの目的として、本学の大学院に在籍する学生に、教育的配慮のもとに教育補助業務を行わせ、教育的効果を高めることを掲げている。また、SAの目的としては、本学の学部又は大学院に在籍する学生が他学生へ学修支援することにより、支援学生・被支援学生双方の学修意欲の向上及び授業内外における能動的学修の活性化を図ることを掲げている。

同3条ではTAの職務内容を、授業担当教員の指導のもと、本学の学部学生又は大学院修士課程学生に対する授業（実験、実習及び演習を含む。）の企画・立案に関すること、授業の実施に関すること、その他授業運営に関することに従事するものとして規定している。SAは、正課授業の支援、正課授業外で行う他学生への学修支援等に従事するものとしている。

このようなTA・SA制度を導入することにより次のような効果を期待している。まず、講義や演習の中で学生に対する質問への迅速な回答や学修資料の提供などのサポートをすることにより、学修環境を向上させる効果が期待できる。また、TA及びSAは学生と教員の架け橋として活動するため、学生の授業への参加や質問などがしやすくなり、学びに対して積極的になることも期待できる。TA・SAは、専門的な経験を積むことができるとともに、学生にとって貴重な雇用機会にもなる。

しかしながら、TA・SA制度に対しては問題点や課題も指摘されている。特に、TA・SAとして活躍できる学生の経験や資格が不足していることからくる問題である。これに関してはTA・SAになるための条件や研修を徹底し、担当教員とのコミュニケーションや役割分担なども明確にする必要がある。また、大学としてもTA・SAの研修やサポートを強化し、教員と学生のコミュニケーションを重視し、フィードバックの収集や改善策の検討も重要である。これらの内容を含めた「広島修道大学ティーチング・アシスタント及びスチューデント・アシスタント制度の実施に関するガイドライン」を制定している。

TA・SA制度がより良い学修環境を整えるための重要な役割を果たせることを期待する。

ピア・サポートの理論を活かしたTA・SAの育成



はじめに

皆さんこんにちは！入学センターの佐々木と申します。私は、これまでに2つの部署で学生スタッフの育成に携わりながら、ピア・サポートの理論を学び実践してきました。本稿では、そうした経験を踏まえ、ピア・サポートの考え方を

活かしたTA・SA学生の育成について、私見を述べさせていただきます。

そもそもピア・サポートとは？

ところで、「ピア・サポート」って何でしょうか。大学においては、どのような活動のことをピア・サポートと呼ぶことができるのでしょうか。日本ピア・サポート学会の定義¹によると、学生が関わる活動がピア・サポートになるためには、以下の4つの条件があると整理できます。

- ①各大学の実態に応じて実施すること→大学や学生のニーズがある
- ②教職員の指導のもと実施すること→活動を指導・支援できるトレーナーが必要
- ③必要な知識やスキルを活かしながら実施すること→知識やスキルを習得できる研修が必要
- ④仲間を思いやり、支え合う教育活動を実施すること→他者をサポートするような活動内容であることが必要

ピア・サポートを実施するためには、厳密に言えば、この4つの条件を満たす必要がありますが、特に②と③はあまり知られていないようです。ピア・サポートは、ボランティア活動や学生FD活動等と混同されがちですが、それらとは一線を画す教育的な取り組みと言えます。

また、ピア・サポートを導入する大学は、日本ピア・サポート学会が定める「プログラムの構造」(下図参照)に基づいて活動を運営するとよいとされており、①研修→②計画→③活動→④振り返りの4つのプロセスを何度も繰り返すなかでより教育効果の高い活動に改善できると考えられています。TA・SAの活動設計や担当学生の育成も、トレーナーとなる教職員主導のもと、この「プログラムの構造」に基づいて進められるとよいのではないのでしょうか。プログラムの各パートについて、ポイントは以下の通りです。



ステップ1－実施の枠組みを設定しよう！

はじめに実施の枠組みとなる活動の理念・目的・目標等を設定します。自分たちが何のために、何を目指して活動しているのか、参加するメンバーで共有することは質の高い活動の維持につながります。

ステップ2－研修をやろう！

学生が自信をもって活動できるように、事前に研修をする

入学センター 佐々木 菜々

必要があります。研修は、「トレーニングの内容と構造」(下図参照)に基づき、順序に従って実施するとよいです。具体的なワークの内容については、日本ピア・サポート学会が発行しているワークブックなどが参考になります。また、研修中はトレーナーから肯定的なフィードバックを返したり、ワークシートに記入させたりする等、学生が研修で何を考え気づいたのかを振り返り、言語化する時間を十分にとることがポイントです。



ステップ3－活動計画を立てよう！

活動に取り組む前に計画を立てます。まずは年間のスケジュールを立て、そのなかで実施する一つ一つの活動について、5W4Hを意識しながら具体的に段取りをしていきます。「企画書」や「目標シート」といった既定のフォーマットを活用すると進めやすいです。

ステップ4－いよいよメインの活動！

活動内容はピア・サポートを導入する大学の実情や学生のニーズに応じて決めます。TA・SAの活動としては、おそらく他の学生からの質問対応や授業内での教員の補助といった活動がメインになると考えられます。

ステップ5－活動後は振り返ろう！

活動終了後は当初の目標・計画が達成できているか、学生たちが活動するうえで難しさを抱えていないかなどを振り返ります。振り返りの具体的な方法としては、学生各自での「振り返りシート」の記入やメンバー全員での振り返り報告会をするとよいでしょう。

おわりに

2000年に通称「廣中レポート」ⁱⁱで「正課外教育の意義」が強調されて以降、多くの大学で学生が関わる学生支援活動が展開されてきました。この度本学で新しく始まるTA・SA制度、そして現状各部署で取り組まれている学生スタッフ活動は、まさに廣中レポートで示された「学生に対する教育・指導に学生自身を活用する」意義深い取り組みと言えます。今後も本学での学生スタッフ活動がますます発展し、多くの学生の成長を促す機会となることを期待し、応援したいと思います。

最後になりますが、「ピア・サポートに興味がある」「学生とピア研修をやってみよう」という方がいらっしゃったらぜひ声をかけてください。一緒に学び、実践しましょう！

ⁱ 日本ピア・サポート学会, “ピア・サポートの理念”.

<http://www.peer-s.jp/idea.html>, (参照 2023-12-11)

ⁱⁱ 文部科学省, “大学における学生生活の充実方策について(報告)－学生の立場に立った大学づくりを目指して－”.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm, (参照 2023-12-11)

初年次教育セミナー

第38回 初年次教育セミナー

学習支援センター次長 木村 和美

2023年12月11日(月)に青山学院大学教育人間科学部教育学科の杉谷祐美子先生をお招きし、第38回初年次教育セミナーを開催しました。

今回は、「大学におけるカリキュラムマネジメントを踏まえた初年次教育と学習支援」というテーマで講演をいただきました。杉谷先生は高等教育論、教育社会学をご専門としており、中央教育審議会、大学設置・学校法人審議会に関わった立場から質保証政策を概観し、その要となるカリキュラムの改革動向やカリキュラムマネジメントのポイントについてお話しいただきました。

まず、中央教育審議会大学分科会質保証システム部会(2022)の「新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について」(審議まとめ)をもとに、質保証システムの改善・充実の方向性について概観しました。そして、大学の3つのポリシーに基づく学位プログラムの編成、学位プログラムを基礎とした内部質保証の取り組み、内部質保証を通じた教育研究活動の不断の見直しによって各大学が社会的ニーズに対応しながらも、多様で柔軟なカリキュラムの編成が求められている状況にあるということでした。

次に、大学のカリキュラムに関する政策の経緯について説明がありました。1940年～50年代の「制度化」、1960年～70年代の「弾力化」、1990年代の「自由化」を経て、2000年代以降は「体系化」を図ることが進められているということです。また近年では、カリキュラムは体系的でありながらも、横断的であり、断続的であり、組織的であり、開放的であり、先導的であることが必要とされているということでした。

そして、文部科学省高等教育局大学教育・入試課学務係(2023)の「令和3年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)」をもとにカリキュラム編成の現状について確認をし、各大学において取り組みが進んでいるものと進んでいないものがあることを押さえました。「能動的学修(アクティブ・ラーニング)を取り入れた授業を実際に行っている」では96.9%となっているものの、「日本学術会議が作成している分野別の教育課程編成上の参照基準を活用」では19.9%にとどまっています。杉谷先生は、活用できるものは活用したらよいと述べられていました。

カリキュラムマネジメントについては、カリキュラム上の関連性と関係者によるマネジメント上の協働性についてお話をされました。特に、カリキュラム上の関連性のためのツールとしてカリキュラムマップやカリキュラムツ

リー、ナンバリングなどを挙げられていましたが、むしろこれらのツールを作成するプロセスが重要であり、FD活動として位置付けることができるということでした。

最後に、初年次教育については、2年次以降の教育への接続と学士課程教育における統合をいかに行うかが課題であると指摘されていました。今日の大学生は「あまり興味がなくても単位を楽に取れる授業がよい」や「大学での授業の方法は、大学の授業で指導を受けるのがよい」の割合が高まっており、大学生の「生徒化」が進んでいるということでした(ベネッセ教育総合研究所編 2022)。大学生の成長にとって何が重要かを考える必要があると述べられていました。

今回の初年次教育セミナーを通して、社会が急速に変化する時代において大学の役割とは何かを考えながら、初年次教育や学士教育課程について検討していく必要があることが分かりました。

【参考文献】

- ・ベネッセ教育総合研究所編(2022)「第4回 大学生の学習・生活実態調査報告書【データ集】」
<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5772> (最終閲覧日 2024年1月12日)
- ・文部科学省高等教育局大学教育・入試課学務係(2023)「令和3年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)」
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1417336_00010.htm (最終閲覧日 2024年1月12日)
- ・中央教育審議会大学分科会質保証システム部会(2022)「新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について」(審議まとめ)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00012.html (最終閲覧日 2024年1月12日)



第13回

教育力アップセミナー

参加者
からの声「教職一体」を体感！
～「第13回教育力アップセミナー」に参加して

商学部准教授 世良 和美



ひときわ暑かった2023年の夏の終わり、9月1日に、協創館3階の8302教室で、新任もしくは近年着任した教職員を対象にセミナーが開催されました。セミナーの目的は、①本学の現状・課題・改善策をデータに基づいて考える、②アク

ティブ・ラーニングの手法を体験・理解する、③教職員の相互理解と協力関係の構築、です。

まず、4名ずつ5グループに分かれて自己紹介。セミナーの目的やアクティブ・ラーニング手法を確認した後、「IR (Institutional Research、大学におけるデータの収集・分析・報告にもとづいた外部評価への対応、経営の改善、教育の改善)」について学びました。続いてグループワーク「どうすれば入学志願者を増やすことができるか？」に挑戦。実際のデータを用い、アクティブ・ラーニングの一手法「ジグソー」を体験しました。これは、テーマを構成するトピック別に専門家グループに分かれて検討した結果を、再びグループに持ち帰りまとめる手法です。私の担当したトピックは、「志願者数の推移」でした。中でも印象的だったのは、他学部の教員からお聞きした競合他大学の取り組みです。ここ数年、「教育水準を上げるために、たとえ定員割れを起こしても合格レベルは下げない」といった施策を継続していたところ、徐々に偏差値が向上していることが、実際のデータでも確認できたのです。この情報は、もとのグループに持ち帰り共有しました。メンバーには、本学卒業生の若手職員も含まれており、彼の意見にも大いに耳を傾けながら模造紙に記入し、「教職一体となって他大学に負けない魅力ある大学教育を！」といった結論にまとめ上げ、報告しました。

2023年4月に一般企業から本学に着任したばかりの私にとって当セミナーは、大学や教育に関する基礎知識やアクティブ・ラーニングを楽しく学べる機会となりました。そして何より、「同期」とも言えるメンバーとともに、一つのリサーチクエストを掲げて答えを探っていく中で、着任以来しばしば耳にしてきた「教職一体」を体感することができました。前途の広がる学生のみなさんを、教職一体となって迎え入れ、真ん中に囲んで大切に育てていくこと…。それが、単なる数値データ上の改善ではない、広島修道大学ならではの「エンロール・マネジメント」ではないか…。そう思いながら、セミナーのメンバーや学生の顔を思い浮かべつつ、会場を後にしました。

データによる課題解決とその落とし穴

入学センター 道花 朋子



今回の教育力アップセミナーでは、本学の現状と課題、そして改善策についてアクティブ・ラーニングを活用したグループワークを行いました。

1. IR データを用いて課題の改善策を考える

「入学志願者を増やすための施策」を課題として、ジグソー法によるグループワークを行いました。ジグソー法は、テーマや課題について役割分担をした上で調べ学習を行い、その学習した情報を他者と交換し、交換した知識を統合してテーマ全体の理解を構築する手法です。担当分野ごとに統計データを分析していく際に、様々な意見が交わされました。多面的な視点でデータを分析し、議論を深めることの大切さを改めて学ぶことが出来ました。

2. データのなかにある落とし穴

また、このワークから、「正しいと思われがちである客観性データは解釈の一つであること、つまり“絶対”ではないこと」を再認識しました。その背景として、ワークのテーマを検討するために用意されたデータは、“延べ志願者数”にもとづいて作成された統計であり、“実人数志願者数”による統計は含まれておりませんでした。勿論、“実人数志願者”による統計は非公開データです。そのため“延べ人数”と“実人数”における入試統計を理解している入学センター課員の私自身にとって、各グループから発表される課題解決の施策の中に、違和感を覚える見解がありました。データから得られた客観的事実は、説得力と信頼性が高い情報であるからこそ、その落とし穴に気を付けたいと改めて認識しました。セミナー終了後、松川センター長にそれらを質問したところ、松川センター長より今回のワークのまとめとして、時間があれば参加者へ伝えたかったポイント2点①反IR、オルタナティブとして、数字では大切なことはわからないという考えを持つ事の大切さ、②IR データに反する考察を持つといった批判的考察は、数字やデータを解釈するうえで必要であることを丁寧に教えていただきました。

3. 事実を解釈するための背景や文脈を理解する

入学センターでは、数字やデータという事実に基づいて意味のある見解をつくり出す必要があります。より正しく事実を解釈するためには、背景知識や文脈を理解し、これまでの経緯などをできるだけ把握しながら業務をすすめていきたいと存じます。最後となりましたが、学習支援センターの皆様、このような貴重な機会をいただきましてありがとうございました。

第77回

LSCドキュメンタリー・アワー開催報告

「お前の仲間の名前を言え！」—魔女狩りの時代と刑事裁判—

法学部助教 前田 星

昨年の12月のこと、このドキュメンタリー・アワーの宣伝ポスターやデジタルサイネージを見て、ぎょっとした方もいたかもしれません。そうであれば、私の「作戦通り」ということになります。

そもそも「**魔女狩り**」(魔女裁判)については、言葉の響きの怪しさのせいか、イメージばかりが独り歩きして、史実に関する正確な知識は持たない、という人も多いようです。私の専門とする西洋法制史の中でも「魔女」は極めて異色なテーマであり、長い間刑事法史の問題とみなされてこなかったという特徴があります。そういった事情から、まずはひとりでも多くの人に魔女狩りについての正しい知識を知ってもらうこと、そして刑事裁判の歴史の中で語ることをコンセプトに今回の話を構成しました。そのため、ポスターはなるべく耳目を集めるようにいろいろな工夫を凝らしてあったのです(学習支援センターの村田さんにはたくさん無茶をきいてもらいました)。

今回視聴したのはNHKの歴史系教育番組「ダークサイドミステリー」です。よくある誤解ですが、魔女狩りが起こったのは、近代を目前にした「近世(16、17世紀頃)」のことです。デカルトが『方法序説』を書いた時代、ニュートンが万有引力の法則を発見する直前の時代であって、一般的に考えられるような「中世」ではありません。刑事裁判でも、既に「無罪推定」や「証拠に基づく裁判」といった「近代的な」発想が存在していました。他方では、キリスト教的世界観が価値観の前提として厳然と存在し、宗教的な罪も犯罪とされたのです。そんな時代だからこそ、「魔女であること」はひとつの犯罪、それも特別重大な犯罪として扱われました。その重さは、現代で比べると**テロリスト**と同じほどです。このように**重大な犯罪**とみなされたこと、そして**組織犯罪**として観念されたことが、裁判の



手続に影響を与え、魔女裁判の連鎖へと繋がりました。そこには、犯罪やそれがもたらす結果が重大であればあるほど、野放しにしてはいけないという発想がありました(ドラマ『24』のジャック・バウアーを想像してください)。ただし注意してほしいのは、魔女への取り扱いは、当時の正規の刑事裁判のやり方の延長線上にあったということです(拷問の利用も合法かつ厳しい条件がありました)。当時の裁判制度への正しい理解なしに魔女狩りを語ることはできませんし、魔女狩りを「集団ヒステリー」と見なすのはあまりに表層的な理解だと言えるでしょう(魔女狩りの終焉を「理性の勝利」と評価するのも同じです)。

さて、映像の中では歴史学者と脳科学者がゲストとして対談をしていましたが、興味深いことに両者のスタンスは微妙にすれ違っていています。歴史学者は、魔女狩りを「その時代に特有の現象」とみなす一方で、脳科学者は「現代でも生じうる普遍的な現象」とみなします。というのも、(私を含めた)前者が魔女狩りの原因を裁判の仕組みや当時の価値観といった「時代によって変化すること」に求めるのに対し、後者はそれを人間の脳の構造や認識の仕方といった「時代を超越して変わらない(と思われる)こと」に求めるからです。どちらが正解とは単純には言えませんが(不正解がないとは言っていない)、学問領域が変わるともの見方も変わるものです。今回はそのあたりの「裏話」も話させていただきました。

当日は多くの学生や教職員にご参加頂きましたが、アンケートを見ると好評だったようで、ひとまずは安堵しています。個人的には「魔女」ないし「魔術」というテーマは、あらゆる角度から論じうるほど奥深いテーマだと考えていますので(それこそ15回分の講義ができるほどには)、またどこかで話をできればと思っています。これを機に魔女についての誤解が少し減るなら、幸いこれに如くはありません。



「SPOD フォーラム 2023」参加報告

学習支援センター 富永 あゆみ

2023年8月23日(水)～25日(金)に愛媛大学で開催された「SPOD フォーラム2023」に参加した。今年度は4年ぶりの対面開催となり、全国の大学などから400名以上の教職員が参加した。SPOD フォーラムは、教職員が自らの能力開発のために役立つ、多種多様で質の高いFD/SDプログラムならびに組織を越えた持続的な相互交流・関係づくりの場となるよう多彩なプログラムを提供しており、3日間でシンポジウムと計42のプログラムが提供された。

シンポジウムでは、今年度のフォーラムのテーマである「未来を切り拓く人材の育成」について、未来を切り拓く人材に必要な能力とは何か、そのためには大学はどのような教育を提供することができるかを具体的な実践の報告などを通して考えていくものであり、能動的に未来を切り拓く意義を学生にいかにつなげるか、具体的に未来を切り拓く教育はどのように行っていくのか、未来を切り拓く人材育成における組織的な課題は何か、などが論点であった。愛媛大学の上月氏の講演にあった「未来思考」というキーワードをもとに、学問的に「未来」を自分の内で考えることにより、より具体的に前向きな未来を想像することができれば、学生にとっても大きなメリットとなるのではないかと

考える。

さらに、「所属大学での学習支援者の能力開発を考えよう」清水栄子氏(追手門学院大学)、「障害のある学生への合理的配慮と修学支援」佐々木銀河氏(筑波大学)、「大学教育改革の力学」田中 岳氏(岡山大学)など、7プログラムを受講した。学習支援者の能力開発や障がいのある学生への合理的配慮と修学支援など、大変興味深い内容であり、今後、学習支援に携わるものにとって、その能力開発の向上は重要であり、必須である。また、自身の学びとして、大学設置基準や大学教育改革についてわかりやすく解説いただき、知識の修得につながった。

2024年度からのカリキュラム改正により、これまで学習支援センターがコーディネートしてきた、修道スタンダード科目の「修大基礎講座」がなくなり、学習支援センターの業務は大きく変化することになるが、「学生一人ひとりの学びをサポート」し、「本学の教育活動の充実に資することを目的」とするという学習支援センターの目的が変わりはしないため、今後もその目的を達成するために努力していく必要があると感じた。

初年次教育学会 第16回大会 参加報告

学習アドバイザー

村田 翔

2023年9月7日(木)・8日(金)、山梨学院大学(山梨県甲府市)で開催された初年次教育学会第16回大会に参加した。今年度は全面的に対面での開催となり、「初年次からはじめるウェルビーイング-学生・大学・地域の豊かな未来のために初年次教育はなにができるか?」が大会テーマであった。両日ともにワークショップや課題研究シンポジウムなど様々なプログラムがあり、初学者としてこれまで初年次教育がどのように展開してきたのか、研究動向としてどのような着眼点で議論が行われているのかを知るうえでは、非常に有意義な機会であった。

プログラムの中で特に印象的だったものを以下にまとめる。まず、ワークショップ「実は初年次教育の文脈で語りたいこと」では、コロナ禍を経て初年次教育における新たな論点について参加者と議論しながら、課題を考えていくことを目的として実施された。私もグループワークの中で、本学の初年次教育の現状や学習支援センターでの取り組みを紹介しながら、他大学の現状について共有することができた。この現状から可視化された課題等について、解決に向けた実践としてどういう取り組みができるのかをグループ内で検討した。

もう一つのワークショップ「アカデミック・アドバイザーングを十分に活用してみませんか?」では、各大学における学修支援や学びの支援など、様々な話題提供がなされたが、意見交換をする中で、課題として現在の学生にとってどういうニーズがあるのか、どういう取り組みをすれば学生が満足するのか、あるいは満足した成果を上げられるのかが見えない状態にあるということが指摘されていた。

学会を通して、各大学で初年次教育がどのように行われているか、その現状を知ることができた。しかし、大学全体での位置づけやコスト面(教材、人件費、専任教員の有無等)、各大学の性質など、様々な要因で大きく異なっていることが分かった。また、入学前教育についても Web上でシステムを構築していく事例やそれぞれの学科の特性を生かして対面プログラムを実施する例も見られた。

一方で、各大学で取り組む内容はあくまで事例研究であり、それらを体系的にまとめたり、類型化したりすることは難しく、さらには他大学の方法を取り入れたり参考にしたりするためには、様々な問題をクリアしなければならないと感じた。



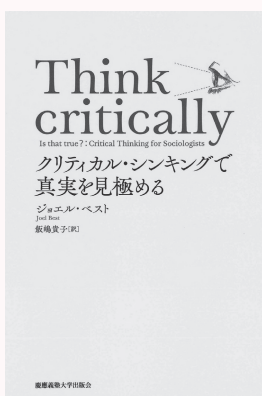
LSC 資料紹介

学習アドバイザー 谷岡 亮

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を集めています。教職員には貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センター(協創館1階)までお問い合わせください。

『Think critically クリティカル・シンキングで真実を見極める』

ジョエル・ベスト著 飯嶋 貴子訳／慶應義塾大学出版会(2021)



本書『Think critically クリティカル・シンキングで真実を見極める』はデラウェア大学のジョエル・ベスト著『Is that true? Critical thinking for sociologists』を飯嶋貴子氏が翻訳したものです。「クリティカル・シンキング」とは直訳すると「批判的思考」という意味で、この「批判」という言葉から、日本では「クリティカル・シンキング」に対しネガティブなイメージを持つ人も多くいるのではないのでしょうか。しかし、この「批判的思考」とは相手の考えを否定したり、粗探しすることを意味しているのではなく、世間にある既成事実や自分自身の考えなどを客観的に見直すことで、主観や偏見といったものを排除し物事の本質を見抜くものとしています。

本書の第1章、2章では「クリティカル・シンキング」とは何か説明し、議論における「クリティカル・シンキング」の重要性を述べています。まず本書では、私たちが日々の会話や書物、メディアなどで触れる、何かがこうであると明言しているものを「クレイム」とし、「クリティカル・シンキング」は、その「クレイム」を評価するためのツールとしています。そこから、私たちはその「クレイム」が説得力があり、信頼できるものと判断すれば、それらは「事実」もしくは「情報」として理解し、疑わしく、信頼できないものであれば、「うわさ」もしくは「虚偽」として解釈するとしています。「クリティカル・シンキング」は、私たちが知っていることは正しいと仮定するのではなく、その仮定が間違っているかもしれないという可能性を考慮することが、必要な姿勢だと述べています。

第3章では、論理的欠陥がある日常的な議論に共通する基本的な要素について説明しています。最初に挙げているのが、証拠としてエピソードを使用することです。エピソードは語る人にとっては説得力があるように見えるかもしれませんが、エピソードは一般化の根拠としては弱く、有力な証拠としてはみなすべきでないとしています。さらに民族性や宗教、政治的思考

など自分とは異なるカテゴリーに属しているだけでその人の議論を否定する「対人論証」も、そのメッセージが、ある特定の人から発せられているという理由で否定することは、推論を行う上で誤りであるとしています。

第4章から7章にかけて、筆者の専門である社会学とは、どんな学問であるか説明し、社会学における「クリティカル・シンキング」について説明しています。社会学とは社会的影響の発生の仕方とそれらが明らかにするパターンを探求することであるとし、社会学における「クリティカル・シンキング」は、証拠とその結果としての人々の行動様式に関する説明を評価することに重点を置いていると説明しています。また、社会学的研究に根拠を与える志向性(楽観的か悲観的か、文化の役割または構造の役割どちらを強調しているかなど)は社会学者の「クリティカル・シンキング」のアプローチに影響を与えるとし、有益であるとしています。

第8章からは社会学において「クリティカル・シンキング」を行う上での留意すべき点を説明しています。特殊用語や流行語などの積極的な使用は、議論の明白性を改善することもあれば、議論する相手の理解を妨げ、議論する意欲を奪いかねないため、慎重になるべきだとしています。社会現象の傾向のとらえ方についても、あるカテゴリー内の傾向を知るだけでは、そのカテゴリーの個々のメンバーに関する結論を引き出すには不十分であるとし、その扱いに注意を促しています。さらに効果的な証拠の性質として、「的を射ている」、「複数の測定値」、「複数の事例」、「理論またはその他の研究結果との一貫性」、「説得力」の5点を事例を挙げながら説明し、「クリティカル・シンキング」を行う上で、留意すべきとしています。最後に筆者は「クリティカル・シンキング」の最大の挑戦は自分自身の考えを正確に評価することだとし、自らの偏見を認識し対処することの重要性を主張しています。

「クリティカル・シンキング」は欧米では早くから教育に取り込まれ、昨今、日本でもその教育における重要性が議論されています。本書は「クリティカル・シンキング」を社会学という学問に合わせわかりやすく説明しており、「クリティカル・シンキング」を理解するうえで示唆のある一冊ではないでしょうか。

<学び★サプリ>

2023 Vol.25

習慣化の難しさ

学習アドバイザー 村田翔

「習慣」という言葉を聞いて、皆さんは何を連想するでしょうか？

「習慣」という言葉を国語辞典で調べると、「いつもそうすることがその人のきまりになっていること」と出てきます。「いつもそうすること」という部分に着目してみると、これまで出来ていなかったことができるようになり、それが無意識かつ定期的に行えることと解釈できます。習慣は、「受信習慣」「言語習慣」「思考習慣」「行動習慣」の4つの習慣の連続によって構成されていると述べられています(吉井2022)。単に行動するだけが習慣になるのではなく、情報を得たうえで、考え、言語化していくことで初めて行動が生まれていくのです。それらが連続することで定着していくと考えられています。

しかし、習慣を定着させるには相当の時間や労力などが求められます。大学では、時間割など自分で生活リズムを作っていくことが必要です。その中で、学習時間の習慣を作ることも大切になります。自分で学習時間を確

保し、少しずつでも構わないので勉学に励むことで4年間の大学生活をより有意義にすることができるでしょう。そのためのポイントとして①何をやるかを考え、言語化し、やったかやらなかったかを具体的に判定できるようにする、②具体的にどれくらいできたのかを記録できるようにする(例えば勉強時間、覚えた単語数など)、③無理した習慣をしないようにする(1日15分から続けてみる等)、以上の3点を紹介します。特に①については、習慣にしたいことを文字にするなど視覚的にも意識できるようにすることで、思考、つまり脳も自然と対応してくるのです。

学習の習慣が定着すれば、おのずと何らかの結果に結びつくでしょう。そのためにも、まずは自分から習慣づくりを始めてみましょう。

参考文献：吉井雅之監修(2022)『最短最速で理想の自分になるワザ大全！習慣化ベスト100』宝島社。

退職のご挨拶

学習アドバイザー 谷岡 亮

2021年4月より3年間学習支援センターにてお世話になりました。今年度末をもって広島修道大学を離れることになりました。長いようで短い3年間でしたが、先生方、職員の皆様、そして学生の皆さんから、色々なことを教えていただきました。心より御礼申し上げます。着任した2021年度はコロナ禍ということもあり、キャンパスは入構制限があるなど、閑散としている時期もありました。担当した修大基礎講座は最初の「ノートテイキング」こそ対面で授業を実施しましたが、その後の「目標設定と時間管理」は3人のアドバイザーで動画を撮影し配信するという形で授業を進めていったのを覚えています。

修大基礎講座、ワークショップ、スタディグループ、学習相談、入学準備学習など多岐にわたる業務がありましたが、特に印象深いのは学習相談です。着任した年から多くの学生が学習相談に来てくれました。英語の学習相談は、比較的単発的な相談より中、長期にわたるものが多く、中には着任した年から今年度まで通ってくれた学生もいます。どの学生も自分の目標に向かって計画し、学習を進め、目標を達成できた時は自分のことのようにうれしかったの

を覚えています。

学習支援センターは大学など学びを深める環境下では大事な施設だと思います。私が学生時代は母校に学習支援センターのような施設はありませんでした。それは同時に何か勉強で困ったことがあれば、先生に直接聞きに行かないといけません、なかなか頻繁に、また長時間質問することは難しいので、おのずと友達に聞くか、自己解決をするという選択肢が一般的になってきます。しかし、それは時に学びにおいて誤解を招くこともありました。学習支援センターでは中間的な立場で、学びの方向性を示してもらるので学生にとって大きな助けになるはずだと思っています。

「大凡世間の事物、進まざる者は必ず退き、退かざる者は必ず進む。進まず退かずして滯滞(ちよたい)する者はあるべからざるの理なり。」福沢諭吉が『学問のすすめ』で著した言葉です。大変なことがあってもあきらめてしまうことは簡単です。しかし、そこから勇気をもって行動し、考え、少しずつ自分を成長させることはとても大事なことです。私自身も今後成長できるように、また学習支援センターに来てくれた学生も今後も継続して成長していけるように、最後のメッセージとさせていただきますと思います。



Hiroshima Shudo University

Learning Support Center
LSC NEWS LETTER
広島修道大学
Hiroshima Shudo University

発行日 2024年3月31日

発行者 広島修道大学 学習支援センター

〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1-1-1 TEL.(082)830-1426

E-mail gshien@js.shudo-u.ac.jp

©LSC NEWS LETTERは大学公式WEBサイトでもご覧になれます。